

特 116

701

老松
杉波
井筒
三升寺
天鼓
三



始



特 116
701



老松 概説 内三卷ノ一

梅津の何某といへる者日頃信ずる北野天神の靈夢に依り筑前
太宰府の安樂寺に參詣せり。松閣瓊門神々しく拜まると處に
老人ありて咲き匂ふ梅の花垣を圍へり。言葉をかけて當社の神
木飛梅と老松との來歴を聞き、其夜は老松の蔭に旅居して神
の告を待ちみけるに、老松の神現れ出で、歌をうたい舞をまい、君が
代を松竹鶴龜になぞらへてことほぎけり。

此曲大体ハ抑ヘテ確リニニ強クハ高妙ニ此スレバ位開カテドモ居着クハ悪シ、其ウチニ自ラ
 緩急アリト知ルベシ
 小書 長序、傳 返レ留、傳

後シテ	ツレ	前シテ	ワシテ	ワキ	役別
老松ノ精	男	尉	從者	神主梅津 何某	
面皺尉 初冠 萌黄又ハ茶大口	直面 着附無地尉斗目 襟赤 扇	面ト牛尉 尉鬘受 着附小格子 緞子腰帶 襟浅黄襟 尉扇 杉葉巾	大臣烏帽子 萌黄上頭襦 紋附腰帶 扇	大臣烏帽子 赤上頭襦 紋附腰帶 扇	装束
白垂 着附厚板(小格子毛) 襟浅黄 神扇	浅黄縹水衣 白大口 紋附腰帶	茶注水衣 白大口	着附原板 赤袴符衣 白大口	着附厚板 袴符衣 白大口	附
能	照	曲柄	月	正	季
(物祇神) (目番初)		誓古順	寺樂安郡紫苑園前筑 (前守太、命)		所
級	一				

真神主三人サリ
 眞次才上
 ツヨク
 柏子三合

ワキ内
 ミツカリ

老松

引もろもろれは都の西。梅津の
 行幕とぬ我が事なり。われ北
 野を信じ。常よ歩を運びゆ所に。
 或友の夢を夢とよ。われを信せば

げに治れる四方の國に治れる
 四方の國關の戸ささで通らん

筑紫安楽寺よまほろ中せきあら
 たよ清心夢をともかりて山向は今
 九洲よ下向依りゆ道行三上サリ行事も
 心よあみよりの時の心よあまよりの
 時の例も有りや日の本の國豊
 かなる秋津洲の彼も音あき四つ
 の海高麗唐土も跡なき法調

真一セイ抄用カニ
 ツシメ上
 拍子合ハス

の道のまろよ安楽寺もよきま
 二けり安楽寺もよきま二けり
 梅の花笠春もまきて縫ふてみ鳥
 の梢かあ松の葉色しも時めき
 て十かへり深き緑かな
 用を遊つて潜かよ用く年の葉
 寺の松の戸よまを遊つて忽ち

シテサシ上
 先カハ

〇小菰
 下中^{下中} 拍子^{拍子} 合^合
 よ。露^{カハル}み^{ホフ}四方^{シヨウホウ}の^ノ 草^{クサ}亦^モまで^{マデ} 祇^シの^ノ 惠^メ
 に^ニ 靡^{ナヒ}く^クか^カと^ト 春^{ハル}め^メき^キ 渡^{ワタ}る^ル 威^イか^カあ^ア
 歩^{フミ}を^ヲ 運^{ハク}ぶ^ブ 宮^{ミヤ} 寺^{テラ}の^ノ 老^{ロウ} 長^{チヤウ} 田^{テン} け^ケ ぎ^ギ
 春^{ハル}の^ノ 日^ヒに^ニ 松^{マツ}が^ガ 根^ネの^ノ 岩^{イハ} 回^{ウエ}を^ヲ 傳^{ツク}ふ^フ
 言^{コト} 席^{シヤク}。 岩^{イハ} 回^{ウエ}を^ヲ 傳^{ツク}ふ^フ 菩^ボ 席^{シヤク}。 敷^{シキ} 鳩^{トビ}の^ノ
 道^{ミチ} まで^{マデ} も^モ げ^ゲ に^ニ 来^キ あ^ア り^リ や^ヤ こ^コ の^ノ 山^{ヤマ} の^ノ
 天^{テン} ぎ^ギ る^ル 雲^{クモ} の^ノ つ^ツ る^ル え^エ を^ヲ も^モ あ^ア は^ハ 惜^シ
 元^元 九^九

ま^マ る^ル 花^{ハナ} 威^イ 手^テ 物^{モノ} り^リ や^ヤ す^ス る^ル と^ト 守^モ る^ル
 梅^{ウメ} の^ノ 花^{ハナ} 垣^ケ い^イ ざ^ザ や^ヤ か^カ て^テ ん^ン 梅^{ウメ} の^ノ 花^{ハナ} 垣^ケ
 を^ヲ か^カ こ^コ を^ヲ し^シ ん^ン 半^ハ 日^{ニツク} 半^ハ 日^{ニツク} あ^ア る^ル 老^{ロウ} 人^{ジン} は
 尋^ヒ ね^ネ ず^ズ へ^ヘ き^キ 事^{コト} の^ノ 心^{ココロ} 此^{ココ} 方^{ホウ} の^ノ 事^{コト}
 あ^ア る^ル の^ノ か^カ 何^{ナニ} 事^{コト} も^モ て^テ の^ノ ぞ^ゾ 聞^ク き^キ 及^ツ
 び^ビ たる^ル 飛^{トビ} び^ビ 梅^{ウメ} と^ト 何^{ナニ} れ^レ の^ノ 木^キ を^ヲ ぞ^ゾ し^シ
 の^ノ ぞ^ゾ 何^{ナニ} ら^ラ 事^{コト} も^モ 愚^{オロ} か^カ わ^ワ 神^{カミ} 等^{トウ} の^ノ
 冬^冬 公^公

たゞ。紅梅殿とこそ、崇め申しゆへ
 げにげよ紅梅殿とも申すべまじや
 泰くもは詠歌より、今、神木と
 なり給へば、崇めても、能きまじら
 ずこそ候へ、是、方なる松をば
 何とが、成、候へし、あ、け、ら、れ、て、ゆ、う
 げにげよ、それも、垣、結、ひ、ま、り、し、御、注

連をとりまき、まよ妙ある神木と見
 えたり、いか、換、れ、は、老、い、松、の
 運くも、口、切、給、み、もの、か、あ、紅梅殿
 の、法、覚、す、ら、ん、色、も、若、木、の、花、守
 ま、で、も、華、や、か、あ、る、よ、引、ま、か、へ、て
 守、ら、わ、れ、さ、へ、よ、若、木、の、歌、古
 び、た、る、ま、り、の、翁、さ、び、し、ま、木、の

老松

日

○獨吟
○切近離子

も^トと^ヲを^ヲ老^中い^サ松^ツと^シ法^ゴ後^ンせ^ニぬ^ル非^ト慮^ル
も^トい^フふ^ク恐^ルろ^クや^ウ尚^ク々^ニ當^ル社^ノの^ヲ謂^フ
妻^ハしく^シ御^モ物^ノ語^リの^ハへ^ニま^ツつ^ニ社^ノ壇^ノ
の^ハ體^ヲを^シお^ハな^レた^ル北^ノは^ニ御^トと^シた^ル
青^ク山^ニあ^リ臙^ク月^ニ松^ノ洞^ノ中^ニは^ニ映^ス
ト^シ南^ノは^ニ窳^ク々^ニた^ル瓊^ノ門^ニあ^リ斜^ニ日^ニ
竹^ノ竿^ノの^ハも^トと^シは^ニ透^ケり^テ左^ノは^ニ火^ニ

焰^ノの^ハ輪^ノ塔^ニあ^リ翠^ノ帳^ニ紅^ノ国^ノの^ハ粧^ノ昔^ニ
を^シ忘^レれ^ズ古^ノは^ニ古^ノ寺^ノの^ハ舊^ノ迹^ニあ^リ
晨^ノ鐘^ノ夕^ノ梵^ノの^ハ響^ノ絶^レゆ^ルこと^ハあ^リ
け^ハに^ハ心^ヲあ^きま^ス茶^ノ木^ニあ^りと^シ中^ノせ^も
か^ルる^ハ浮^世の^ハ理^ヲを^シバ^ク知^ルべ^ク知^ル
下^ノ諸^ノ木^ノ中^ニは^ニ松^ノ梅^ノの^ハ神^ノは^ニ天^ノ神^ニ
の^ハ自^ラ愛^シて^ハ紅^ノ梅^ノ殿^も老^い松^も

クセト抑ハテ
拍子三合

チ

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

皆事社と現し、中 茲へり、中 ざればこの
 二つの木は、中 我朝より中 もあは漢家
 に徳と顯し、中 唐の帝の御味は國よ
 文學感んあれば、中 花の色と増し
 自常より優りたり、中 文學をた
 れば自もなく、中 其の色も深からず
 さること、中 文を好むはありけりと

て梅と、中 好文と、中 付けられたれ
 きて松と、中 大丈と、中 事は秦の始
 皇の時、中 天候かよ、中 曇り
 大雨頻りよ、中 降り、中 帝雨を
 凌かん、中 小松の陰よ、中 雲り、中 珍み、中 の
 松俄かよ、中 大木と、中 あり、中 枝と、中 垂れ
 葉を、中 並べ、中 木の、中 向す、中 ままを、中 塞ぎ

○小議

てその雨を漏さざりてかば帝大
 夫といふ爵を贈り給ひしより
 松と大夫と申すあり
 名高き松梅の節も子代までの
 行く末久よみかきもり身るべし
 身るべしや神はとも同ド名の
 天備つ空もくれあみの花も松

口古ニ
 神をひて失子
 けりあそかみ
 まて失子けり

○平上三入サリ

待議

も諸共よ。萬代の妻とかや
 萬代の妻とかや
 嬉しきあやいざらざらむ嬉しき

○難子三入モ

かあやいざらばこの松陰は核各
 して凡も肅く寅の時神の告をも

あちて見ん神の告をも侍ちて見ん
 如何に紅梅殿今我の客人を何

後シテ上極因カニ
 皇三合六

老松

とか慰め給ふべき地サリげに珍らかよ
 春もたち梅も色添ひ地サリ松地サリて
シテ上シカカリも名こそ老い木の若緑甲クル
地サリを燈又渡る神かぐら歌シテトとろうた
又舞をとまひ地サリ舞樂と傳ふる宮寺
コトの聲も満ちたる有かたや真之序之舞
シテワカ上シカカリラズニさす枝のさす枝の梢の若木の

○獨吟住舞

日中花の袖シテ中花の老い木の非松の
サ花の老い木の非松の千代よ八
サ子代よさされ石の巖となりて音
シテ中のむままで拍子合ハス音のむすまで松
イ竹鶴亀のキ鈴と授くる君の
行行く末護れと神託の告を
志志らする松も梅も久しき妻

○小謡

冬

冬

こころこころめめででたたけけれれ

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

頼政 概説 内三卷ノ二

廻國の僧宇治の里にて老人に會ひ、名所古跡を教へられたる末、導かれて平等院に到りぬ。此所にて老人は扇の芝の由来を語りて聞かせたる後、其身は頼政の亡靈なりとて姿を隠せり。僧は頼政の菩提を弔いぬる處に、其靈老武者の姿にて再び現れ、治承の戦を語り或は其様と摸して見せたる末、名残の一首を詠みて扇の芝の蔭に失せけり。

此曲ハニ番目物ノ内ニテモ性立チタル曲ニシテ老人物ノ修羅ナレバヨク心ヲ付ケテ誦スベシ

役別		装束		附	
後シテ	源頼政	前シテ	老人	ワキ	旅僧
面頼政 頼政頭巾 白茶金補鉢巻 無色掌板唐織 法被 半切 縫紋腰帶 襟白浅黄 太刀 修羅扇		面朝倉尉(又ハ笑尉ニ) 尉髪 着附無地對斗目 茶挂水衣 緞子腰帶 襟浅黄 尉扇		角帽子 着附無地對斗目 水衣 緞子腰帶 扇 珠敷	
目	番	曲	月	季	所
	二	柄	五		
	(物羅修)	誓古願	院等平治宇郡世久国城山		
級	二				

ワキ僧門シツカリ

頼政

これは諸國一見の僧あてゆ。われ
 この程ハ都に作ひて洛陽の寺
 社跡なく掃み思ひてゆ。又これ
 より南越子よまらざるやと思ひ作
 天雲の稲荷の社依し掃みい
 りの社依し掃み。なほ行くまは

頼政

道行上
 拍子三合
 ヨラク
 切ヤ

深草や本幡の陣と今越えて
元来 依見の澤田見え渡るあゝの氷上
子ヤ 尋ねきて宇治の里も急ぎに
中 けり宇治の里も急ぎにけり
ウツカ げにやを國きて聞き及びり
内持 治の里山の筑川の流遠の里橋
ト の景をこゝろ多き名前かあを
ウツカ

宇治合八
 宇治合八
 宇治合八

シテ老翁
 関カニ

呼掛

フキ
 サラリ

れ里人のまかりゆへか
 あうなう御僧の行事を任せ候ぞ
 りれゆこの前始めて一見の者ありて
 ゆこの宇治の里はむらして名前舊
 流跡あく御教へゆへ 處は住み
 ゆらも賤しき宇治の里人あれは
 名前とも舊跡ともいふ白浪の宇

治ツのリは。毎ニと橋トとハありあがら。
 渡エり兼ニねたル。世ノ中ニ住スむハカ
 ントなるハ名前ヲ前ニ後ニ跡ヲ行フとカ参リ入リ申ス
 すべきコト。早ク申ス。早ク申ス。早ク申ス。
 勸ク学院ガクの雀ノ蒙モウ求ギウとサハシ入リ。
 處ノ人ヲあてましませば御オン心コ憎ニクうこ
 そノへまつた。花キ撰セン法ホフ師シが任みける處。
 一ニ

はらづくの程あてるコト。一ニさればこそ
 大ダイ事ジの事と申事ヲねあれ喜撰セン
 法ホフ師シが處の種カ菴の都の聖志カ
 一ニ住スむ世と守治シ山ヤマと人の心よりあり。
 人ノ心ノあらずコト。主シたもも中しコト。
 へ耐の知らずの心。又モあれば一村ノ室シ
 の見えてはは松マキの鳴がか
 一ニ

しがんと棹の端とも中し又宇治
シテ内抑ヘテ
の河嶋とも中しあり 早上ニサラン しがんと見
えたる小嶋が端 タチハナ あり橋の小
早上ニサラン
嶋が端 向ひよ見えたる寺は
あらずまは慧心の僧教の端法を
後き一寺の シテサリメニシラカヘ あらう格人 クニヒト あれ
シラヘト ば殿せよ ヨツク 名も似ず月こそ出 ヤ

巻四

づれ朔日山月こそ出づれ朔日山月
吹の瀬ノ歌見えて雪さ一た
す嶋小舟山も川もねほろねほろ
心持シ
として是非を分かぬ景色 シカフニ あり
げにや名も負ふ都に近き宇治 ヤ
の里聞きよは勝る名前かな聞き
しに勝る名前あり シテ内抑ヘテ あり ヤ

願文

この處は平太院と申す御寺のゆ
 へどは後せられてゆか 不知案内の
 事ありゆ程よ。まだかんずゆ御教へ
 ゆへにまたへ御出でゆへ。されこそ
 平太院ありゆへ。又これなるは釣殿
 と申して。面白き前ありゆよくよく
 後ゆへ げに面白き前ありゆ。

又これあるまきをを身れば。扇の如く
 取り跡されてゆへ。何と申したる
 事ありゆぞ 此に作このまきよつ
 いて物語のゆ程つて聞かせ申しゆ
 べ。昔この處に宮軍のありしに。
 源三位頼政合戦に討ち負け給ひ。
 この處は扇を敷き自害し果て

孫ひぬされば名將の古強あれば
 こそ扇の形よ取り跡して今に扇
 のまくとやししゆ拍子合痛ッロキル上サリやさきも
 文武よ名をと得し人あれども跡の
 草露の道づべとあつて行人征
 馬の行への如しサトあら痛ッサやゆ
シテげよよく御吊ひゆものかあ。志かも

その宮軍ミヤイクサの月も白も今日イマに當り
 てゆいかなワキ行とそその宮軍の月

シテ中抑も白も今日イマ白も白も今日イマに當り
 かなサはわれあから余サに
 あらぶ格人のまの松マツの森の母に
 姿見をえんと身ミたり現マとお思ひ
 絵エひろウとよウ受ウの浮世ウの中宿ウの

夢の浮世の中宿の宇治の橋
 守年を經て若の波もうち渡す
 遠方人よもの申すわれ頼政
 幽霊と名告もあへず失せよけ
 り名告もあへず失せよけり中入語間
 かくては頼政の幽霊假も現れわれ
 又詞と交けりやいざや御跡

平内サテ

ちんとして思ひ寄るべの浪花思ひ
 寄るべのなみ枕げもゆりこの庭
 の扇のきとけ敷きて夢の契を
 待たうよ夢の契を待たうよ
 血の涿鹿の河とあつてお波楯を
 流し白双骨を碎く世と宇治川
 の細代の波あら幽霊や伊

後シテ頼政上シテ
一上ツク
拍子三合

勢武者の皆非威の鑑著て。字
 治の綱代はかりけるかなうた
 のあはれはかなき世の中に
 蝸牛の角のあらうひも。耳か
 かりける心かな。あら尊の御事や
 尚々御経讀み給へ。かまやあ法
 體のまにて。甲冑と帯し御経讀

めとあるぬが。さま聞きつる源三
 位のその幽をみて。ますますか
 げにや紅の園生は植ゑても隠れ
 ぬ。名告らぬさきの頼政と忠賢
 ずるこそ。死うけられたる御経
 讀み給へ。御心安く思しるせ。五
 十展持の功かたよ。成佛まさよ

疑あり。まゝてやされは直道よ
用ひあせむ法のが。合ひよ合ひ
たり處の名も。平等院の庭の
面。思ひ出でたり。佛在世よ
佛の説き。法の場。佛の説き。
法の場。そぞ。平等大慧の切かよ
頼政が佛果を得し。有難き。

上
上の同サ
拍子三合

シテ上
シツカリ
拍子三合

今、行をか色むべま。これの源三位
頼政。執心の彼よ。深き。沈む。因果の
方。後現す。なり。そも。うも。治
兼の。夏の。頃。よ。あき。出謀叛を
勧め。申し。名も。高倉の。宮の。内を
居の。よろ。子。有。明の。月。の。影。を。悪
び。出で。憂き。時。しも。近。江路。や。

頼政

九

日中 三井寺指して落ち給ふ 御下名 押合 御下名 押合
 平家の時と由さず 較萬騎の兵と 御下名 押合
 閑の東は造すと聞くと音羽の 御下名 押合
 山續く山科の里近き 亦幡の閑 御下名 押合
 ともよろし又見て 御下名 押合
 心守治の川橋打ち渡り 大和路指 御下名 押合
 して急ぎし 寺と守治との間 御下名 押合

閑路の跡の隙もあく 宮の六 御下名 押合
 度まで 出落馬して 煩わせ給ひ 御下名 押合
 けり され 前の 表御寝 あらざる 御下名 押合
 ゆゑあり して 平等院 ありて 暫く 御下名 押合
 閑を構へつ 守治橋の中の間 御下名 押合
 下 離し 下の 川波 上は たるも 御下名 押合
 共よ 白旗と 靡して 寄する 敵と 御下名 押合

明心 〇獨吟
 御ち居たり。ウミテ語りシツカリ
 宇治川の南水の岸より打ち臨み。
 関の聲矢叫の音。波よ頼へて夥
 し。橋の行村と隔て。鞍み味方に
 筒井の浄妙。一乘法師。敵味方の
 目と尋す。かくて平家の大勢。橋の
 引いたり。水の高し。さすが難所の

大けあれ。べ。左右あり。渡まき。まやう
 もあか。つ。所よ。田原の又。大島。忠
 總と名告つて。宇治川の先陣。われ
 あり。と。名告り。もあへず。三百余騎
 鑓を揃へ。川水よ。少し。もた。め。ら。ぬ。す。
 むれ。ある。群鳥の翅。と。並。ぶ。る。羽音も
 かく。や。と。白波よ。さ。つ。と。う。ち。入

頃改

十一

ねて。ほさぬ。沈みぬ。渡しけり。
 忠。総。兵。を。下。知。り。て。曰。く。水。の。逆。巻。
 く。可。を。下。手。に。立。て。強。ま。に。水。を。
 馬。を。下。手。に。立。て。強。ま。に。水。を。
 隊。が。せ。よ。流。れ。ん。武。者。よ。等。苦。を。
 取。ら。せ。互。よ。力。を。合。ま。べ。と。取。ら。す。
 の。下。知。り。よ。上。の。下。の。大。河。

あ。れ。ど。も。一。騎。も。流。れ。ず。沈。方。の。
 峯。よ。を。め。り。て。あ。が。れ。味。方。の。勢。
 わ。れ。あ。が。ら。踏。み。た。め。ず。半。田。は。かり。
 先。え。ず。志。さ。り。て。切。先。を。揃。へ。て。
 こ。を。寂。部。と。戦。み。たり。さ。る。程。よ。入。
 り。乱。れ。わ。れ。も。わ。れ。も。と。戦。へ。ば。
 頼。政。が。頼。又。つ。ら。兄。弟。の。者。も。

討たれけれだシテ仰テ今何をか期す
 べきと地元唯一筋は老武者のシテ中知れ
 までと思ひてたれまでと思ひて甲
 平等院の庭の面元たれある芝の上
 扇を打ち敷き甲鎧脱ぎ捨て乙座
 を組みて乙刀を抜き乙あがらさず乙か
 を得しその牙とてシテ上埋れ木の乙

花咲く事もあかりト身中のなる
 ちて乙の衣なりけり拍子三拍あし乙吊ひ乙給へ
 御僧より元あり元あがら元れ元ても
 他生の種ガチの縁ガチは今扇元の芝元の草元
 の陰中は中歸中るとして失せ乙よけり乙立
 ち歸るとして失せ乙よけり乙

井筒 概説 内三卷ノ三

廻國の僧大和國石ノ上なる在原寺に立寄りたるに、女性ありて塚に手向をなせるより仔細を問へば、此寺の本願在原業平の跡のしるしは此塚と聞くがまゝに弔ひまゐらするなりとの事に、塚のあたりを見れば一叢薄の穂に出でたるが立てるのみなりけり。女は業平が紀有常の女と契りし事など委しく語りたる後、其身は有常の女なりとて井筒の影に隠れぬ。夜も更けし頃、此女、業平が有りし世の姿に扮して現れ、歌い舞ひ、井筒に寄り添ひては古を忍ぶ氣色なりしが、いつとなく消え失するを見て僧の夢は覺めけり。

此曲極閑カニシテ優ニ謡ヒ其内ニ自ラ緩急アルベシ
 小書 物着 彩色傳

後シテ	前シテ	ワキ	役
紀有常ノ女 井筒姫	里女	旅僧	別
面若女 初冠 懸纒追掛 着附階箔 紫長絹 縫油腰卷 桐箔腰帶 襟白 葛扇	面若女 鬘 鬘帶 着附箔 唐織着流 襟白 木ノ葉	角帽子 着附無地鬘斗目 水衣 緞子腰帶 扇 珠數	装束附
目番 三	曲柄	月九	季
物 鬘	警古順	町市波丹郡迎山縣大 寺原在上石	所
級 二			

半僧詞因カニ

井筒

これの諸國一見の僧あてのわれこの
 程の南都七堂よまゝりては又これ
 より初瀬よ冬らばやとあじゆ
 くれなる寺と人よ事ねてはば
 在愿寺とあやがし程よまぢ
 寄り一見せむやし思ひゆ
 カル上流ラカ入用カニ
 ヨツク
 梅子合

この在原寺のいしに業平紀の有
常の息女夫婦住み給ひし石の
上あべし風吹けば津つ白浪龍
田山と詠ふけしもの霞その
事なるべし下奇用カニ音終の流傍へ
その業平の友とせし紀の者常
の常なまき世妹脊をカかけて吊

つと妹脊をトかけて吊トん

次行女

暁毎の関伽の水ト暁毎の関伽の水
月も心やすますらんトおあま
だよ物の淋サき秋の夜の人目稀
ある古寺の庭の松風更アけとま
て月も傾く狩端の草ト忘れて過
ぎト古と君ト顔トにていつまでト侍

并前

つ事な^ツく^テあ^カら^ハ入^ルん^ケに^ハ行^キ事^ス
 も思^ウひ^出の^人よ^ハの^孩る^世の中^カな^ハ
 下^カり^合た^リつと^アく^一筋^ノ頼^ム佛^ノ法^ノ
 手^ノ系^導守^キ法^ノの^聲年^ノ迷^ヒと^シ
 も照^スさせ^給み^御誓^言照^スさせ^給み^御
 誓^げに^はも^とな^んえ^て方^明の^行方^方
 ハ西^ノ山^あれど^眺か^回方^方の^秋の^空
 ○小議

松^ノの^聲の^及聞^けれど^も岩^から^らづ^づ
 くとも^も定^みあ^まの^世の^夢心^行の^音
 みか^覚め^てま^ま行^の音^にか^覚め^てま^ま
 て^まま^まわれ^この^寺に^休ら^ひ心^心
 を^澄す^おか^しと^おま^めけ^る女^女
 性^性の^板井^と掬^びあ^げ花^花氷^氷
 一^一れ^なる^塚の^向の^氣色^見え

シテ落着イテ

おまの女カハツテなる人あてしまま志ますぞ
 引シテれハ其のあたりに住む者なり
 この寺の本願社愿の業平は
 世は名をとり人なり先ラカハさればその
 跡アトの證シもこれなる塚の陰やらん
 わらわも毒クくぬからズ人とも
 花水と手向け御跡オシと吊トハラひまみ

コ羊カッテ

らせコびコびコの業平の御事は
 世は名をとり人ありつら
 今ハ其の昔謀ガタリの跡
 なるを志ニヨも女性シヤウの御オシ牙ミとして
 かもうに吊トハラひ給メ事。その在愿の
 業平カハル上は神合いかさま故ある御オシ牙ミや
 らんシテ故ある牙カと向ムカはせ給メ

その業平のその時だも昔男を
 いまれ一才のましてか今の遠ま
 世よ故もゆかりもさるべからず
 かもとも作はさる事あれどもさ
 昔の舊松までまこそきき業
 平のあといあうてさすおよ
 まだ聞えのちぢちぬ世語を

○小謡

語れべ今も昔男の上り名ばかり
 在原寺の松ありて在原寺の
 松ありて松も老いたる塚の葉
 きてろろそれよ七き跡の村す
 きの穂よ出づるからつの名跡ある
 らん草花をきて露深々と古
 塚の真あるかお古の跡あつかり

口平内カッテ

景色イかおイ然イあつイかイきイ景色イを
 あイほイなイはイ業イ平イのイ御イ事イ妻イくイ御
 物イ語イりイのイ久イ昔イ在イ原イのイ中イ將イ
 年イ経イてイまイよイいイそイのイよイまイりイにイ
 里イもイ花イのイ春イ月イのイ秋イもイてイ住イみイ給イ
 ひイりイはイまイそのイ頃イのイ有イ常イかイ娘イと
 契イりイ妹イ脊イのイ心イ清イからイざイりイまイよイ又イ

○サ由独吟

シテ中

河イ内イのイ國イ高イ安イのイ里イにイ知イるイ人イあイりイて
 二イ道イよイ君イかイびイてイ通イひイ給イひイまイ
 風イ吹イけイばイ沖イつイ白イ波イ龍イ田イ山イ夜イ半イ
 ちイやイ君イかイびイてイ行イくイらイんイとイあイほイつ
 かイあイまイのイよイるイのイ道イ行イ方イをイ思イみイ心イと
 げイてイよイるイのイ契イのイかイれイかイれイあイりイ
 げイにイ情イ知イるイうイたイかイたイのイ表イをイのイ人イ

いも。理あり。昔その國よ。住む
人の有りける。か。宿をと。並べて。門の
前。斗。筒よ。より。て。う。お。み。子。の。あ。だ
ち。語。ら。ひ。て。互。に。影。と。水。鏡。面。と
並。べ。袖。と。かけ。心。の。あ。も。底。ひ。あ。く。
移。る。月。白。も。重。あ。り。て。花。と。あ。志。く
恥。ぢ。が。り。く。互。よ。今。あ。り。ま。け。り。

その及彼ののまめ男。そ。葉。の。露。の
玉。章。の。心。の。花。も。色。う。ひ。て

筒井筒井筒よ。かけ。ま。ろ。か。た。け。
生。ひ。よ。け。ら。し。お。妹。え。さ。る。向。み。と
詠。み。て。贈。り。け。る。程。よ。そ。の。時。女。も
くら。え。く。り。わ。け。髪。も。肩。過。ぎ。ぬ
君。あ。ら。ず。し。て。報。か。あ。ぐ。べ。ま。と。互

井筒

子詠み一故あれや。筒井筒の女
 ども聞えし者帝が娘の古ま
 名あえべし。げにや。たりし物語
 聞けぬ。ある者様のおや。お名
 告りたつませ。真のわれは戀
 衣紀の有常が娘もいさ。白波の
 龍田山夜半は紛れて来りたり。

地上サリタス心
 かしきむそは龍田山色にう出つ
 るもみぢ紫の紀の者帝が娘
 ども又の井筒の女も。恥し
 あからわれありし。よや。往連繩の
 初がま。夜と。契りし。年。つ。井
 づ。井筒の陰は隠れけり。井
 筒の陰は隠れけり。中人語問

○切遣舞子

更フけ行ルくや。在ニ原ラ寺ノのよルの月ト。
 在ニ原ラ寺ノの夜トの月ト昔トをミす衣ト平ト。
 子ト。夢ト待ツちウ入テて假ト松ト苔トの席トふ。
 外ニにけりト昔トの席トはト即トにけりト。
 後シテ上ニ朝カニウキリト。
 声ト一ト。
 拍ミ合六。
 あダあリしウあリよコそト立テれト櫻ト花ト。
 年トは稀トあリるト人トも待ツちケりトかヤりト。
 子ト縁トみトしトもトわレあレばト人ト待ツつト女ト。

もトいッれトあリ。わレ筒ト井ト筒トのト。
 音トよりト真トらト概トらト年トをト經トてト今ト。
 かハあキてト世トはト業ト平トのト形ト見トのト直ト衣ト。
 子トはトわレてト恥トかリやト昔ト男トはト後ト。
 舞ト雪トをト廻トすト花トのト独ト。
 シテワカ上ニ明カニト。
 獨ト吟ト。
 上ニ地ト。
 寺ト井トはト澄トめるト月トぞトさトらトけトきト月ト。
 頭ト付ト。

井筒

ル

其傳

其傳

○住舞

ぞさもやけまシテ中月用カニやあはらぬまウ元カわ
 音中と詠中めし中もいら中つ中の頃中ぞわ中筒中
シテ中井筒中つ中あ中つ中井筒中は中かけ中
シテ中あ中ろ中か中た中け中生中ひ中よ中け中ら中り中あ中
シテ中あ中い中よ中け中ら中り中わ中あ中ら中見中み中え中
シテ中昔中男中の冠中直衣中あ中ら中見中み中え中す中
シテ中男中あ中り中け中り中業中平中の中面中影中見中見中れ中は中

あり中う中ら中な中わ中あ中れ中あ中ら中あ中つ中か中ら中わ中
シテ中亡中婦中魄中霊中の安中の調中める中花中の色中
シテ中無中う中そ中う中あ中り中て中在中原中の寺中の鐘中
シテ中も中ほ中のぼ中の中と中あ中ら中れ中ば中古中寺中の松中風中
シテ中や中芭中蕉中茶中の夢中も中破中れて中覚中え中あ中
シテ中み中け中り中夢中の破中れ中明中け中り中ま中け中り中

千奇

一々

三井寺概説 内三巻、四

駿河國清見が關の女、京都清水寺の觀世音の靈夢にまかせ、人商人に誘拐され一子千滿を尋ねて三井寺に赴けば、折から八月十五夜の月の眺め面白く、鐘の音聞え來にけるにぞ、我も成佛の縁を得んと撞き出せば、偶月見に來り居たる住僧、狂人と見て鐘樓と出てよと叱咤す。女は唐土の聖人すら月には心亂れて鐘撞き事あり、まして狂人の身なれば許したまへとて鐘に縁ある事ども語る。さるほどに住僧の伴ひ一童子此女の故郷を訊ねて其身の母なる事を知り、名來あひて鐘ゆゑに再會せしと喜び打連れ歸りけるが、此子孝心深く遂には富貴の家となりけり。

此曲ウラノトノミ謡ハズ伴リノ狂女ナレバ其心シテ謡フベシ
小書 無非之傳

役別	装束	附	季
シテ十満ノ母	面深井 鬘 鬘帶 着附摺箔 無色唐織着流襟浅黄 珠數		八 月
子方稚兒十満	直面 着附綾箔 兒袴 縫入腰帶 襟赤		所
ワキ 三井寺住僧	角帽子 着附小格子 水衣 白大口 縫込腰帶 珠數	曲柄	前 京 都 東 洛 水 寺
早シテ 從僧	角帽子 着附無地鬘才目 縫水衣 白大口 縫込腰帶 珠數	四 番	後 三 井 寺
後シテ 狂女(滿母)	面深井 鬘 鬘帶 着附摺箔 水衣 無色腰卷 縫入腰帶 襟浅黄 扇 篋	(物女狂)	二 級

三井寺

シテウラノトノミ謡ハズ伴リノ狂女ナレバ其心シテ謡フベシ
ヨワク 拍子三合六

南無や大急大悲の觀世音さ
も草さしもかこまき誓の末一絲
一念あは頼あり。ましてやこの
強日と送り。あを重ねたる車
車。あどかそのかひあうらんと
心づゝ哀ある。憐み給へ思ひ

三十一
子の行く末何となりぬらん行く
末行となりぬらん上三行字が又ヤウ同カニ拮れたる木
まだほも枯れたる木まだも花
咲くべからはれキ切キ切のづから甲未だ若木の
みどり子よ二度なごか逢はざらんトヤヤ
二度なごか逢はざらん用ハ心あらむ種
やぶがすしスナ睡眠スネのうらよあらたある

夢を夢と夢あつてふらふわらふ
さつとも訪ひ慰むる人のいあはれ
ありりやう語らむと思ひ候

シテ
只今狂言かきし睡眠シテのうらよあらた
あるはあまを夢と夢あつてい我があま
海はしと思ひ三井寺へまれとあら
たよは雲夢を夢と夢あつてい狂言あら焼

いと御ありせらるものかな。告よ任せ

て三井寺とやらん。まありのべし。中入

秋も半のくれ侍ちて。秋も半の

くれ侍ちて。月よ心や急ぐらん

これは江別園城寺の住僧とてい

又これよわたりの稚き人の愚僧

と頼むは任せらる回方あく解弟の

契約となりやしての。又今夜の八

月十五夜。月少ての。稚に稚き人

と伴ひやし。皆々鎌堂の庭よ出

て。月を眺めどもやとあじは

類おまき。名を望月の今宵とて

名をもたら月の今宵とて。夕を

急ぐ人の。知らぬも諸共よ

住僧四人サアリ
次才上
拍子二合

ワキ内明カニ

気ラカへ

気ラカへ

上希持謡
四人

キカヤ

用ナレ

キカ

三井寺

三

雲を厭みわかぬてより月の名頼
 む。日歌かお月の名頼む日歌かお
 後聲 後聲 後聲 後聲 後聲 後聲 後聲 後聲 後聲 後聲
 拍子合 拍子合 拍子合 拍子合 拍子合 拍子合 拍子合 拍子合 拍子合 拍子合
 の吹をきと詠げん志賀の山歌
 うちらさぎて眺の末は湖の鳴
 照る比叡の山高み。上るぬ鴛鴦の
 山とやらんを。今目の前ふ拜む

事よあら者程の御事やかわらう
 子心あり顔あれどもわれのものふ
 抱ふよあう。らやわれあから理あり。
 あの鳥類や畜類だもも親子の
 義のあるぞうか。ましてや人の親
 としてはほし悲しと育てつる。
 子の行方をも白急の乱れ心や

上野入

シテ用ニ神ビリ

ウケテ

元ガ

行ニ

狂ふらん

翔

都の秋を捨てて行くを

○小諸

○小諸 抽子命 伸ビリト花ガサ

月見ぬ里に住みわあらるるこそ

そ人の笑めよー花も紅葉も

月も雪も古郷は我カ子のあ

あらば田舎も住みよかべーいざ

古郷は歸らんいざ古郷は歸らん

歸ればさ波や志賀幸待の二つ

松みどり子の類あらば松月子言

問わん松月も今ハ厭を梅咲く

春あらば花園の室も早くすぎ

間吹く風すすさまーまき秋の吹の

三井ちよよまきにけり三井寺よ

早くまきよけり。桂はみのる

三五の暮る名高き月よあこがれて

庭の木陰に休らふ。シテ先ヨカヘサリメニ
 宵の三五夜中の新月の色に子
 里の糸の故人の心水の面は照る
 スント、和ソト、中ユタ
 月もみと数めれば秋も最中夜
 もあびる前うらさへ面白や。上ホサリ
 山風が時雨は鳩の海風が時雨は
 後の海波も栗津の森にえて。

○小謡

海船よの幽かに向み影あれど月
 ますみの鏡山山田矢橋の渡し
 舟の夜の通人あくも月の橋
 われのづから舟もこがれて出づらん
 舟人もこがれ出づらん。シテ内心持シ
 の音やお種が故郷あての清見寺
 の鐘をてそ常の閑き別れし。

くれは又さきはわ。三井の古寺鐘
ツヨク中ニルメ
 のあれど昔は歸る聲の聞えず。
ツヨク中ニルメ
 真や此の鐘の香の郷とやらんの
マコト
 龍宮より訪りて歸りし鐘あれ
カレ上ヨク
 へ流女が吹佛の縁は任せて
ツヨク
 も鐘と撞くべきあり
ツヨク
 から霜夜まで影はさあがら霜夜
地次才上
拍子合
歌のさあ

ほと月みや鐘の海はぬらん
仲
 やあ暫く狂人の身まで行きて鐘
カクチ
 との撞くろ急いでのみさへ
シテ
 公が樓よ交るしも月よ詠せ鐘
コウ
 の音なりゆるさめ
コウ
 故人の詞狂人の身として鐘撞く
シンカリ
 づま事思もよらぬ事まであるぞ

とよ シテカッテ 今宵の月よ鐘撞く事狂

人 ジン としてお厭ひ給ひし オイト 或詩よ曰く

因 中用カニ として海橋を歌れ ハシ 漸 シツカリ として

雲衢を出づ クラカヘ での後分おかり カバ

月日は向つて モ ひとと逢まらして 中シツカリ 今宵

一輪満てり イナハク 清光行れ ツ の所 トコ よか

無 ナ からん ハナト こと ハ あり ハ まう ハ けて ハ 餘り

鐘ノ段
○独吟仕舞

の嬉 ウレシ しい ハ 乱れ ハ 高樓 タカウミ よ登つて

鐘と撞く ツク 人 ヒト ぞ ハ いろ ハ ごと ハ 答 コタヘ あり ハ こそ

ハ詩狂 シキヤウ と ハ 谷 ヤ 女 メ が ハ 狂 キヤウ の ハ 聖 セイ 人 ジン なり ハ し

だよ ダ 月 ツキ よ ハ 乱 ハ る ハ 心 ココロ あり ハ まう ハ して

や ヤ 拙 ツテ き ハ 狂 キヤウ 女 メ あ ハ れ ハ ば ハ 許 ヨク し ハ 給 タマ へ ハ や

人 ヒト ぞ ハ 又 マタ 煩 ワザカシ 悩 ウレシ の ハ 夢 ユメ を ハ 覚 サト す ハ や ハ 法 ホウ の

聲 コエ も ハ お ハ 妙 タマシ かな ハ ま ハ 初 ハツ 夜 ヨ の ハ 鐘 カネ と ハ 撞 ツク く

時は諸行皆空と響くあり

後夜の鐘を撞く時か 是生滅

法と響くあり 晨粥の響く

生滅已入相寂滅 馬樂

と響ききつて空の道の鐘の聲

月も救そひて百八煩惱の眠の

驚く夢の世の迷もさやつきたり

や後夜の鐘よわれも又障の雲

暗れて真如の月の影を眺め居

りて唯さん 長樂の鐘の

聲の花の外は盡きぬ又龍池の

柳の色は雨の中は深し其の亦

るも世々の人言塔の林のかね

て聞く名も高砂の尾上の鐘

曉アケツキかハけテて秋アキの霜シロ曇クモるルか月ツキもモこトも
 りリくクの初ハツ詣ミもモきキしシ難ナ波ハ寺テ 名ナ前マエ
 多タのノまマのノ鐘カネのノ音ネあアぬヌやヤ法ホウのノ聲ネあアらラん
クセ中 藤原カミ山ヤマ寺テのノ妻メのノ夕ユフ音ネあアらラてテ見ミれレ入イ相ソウ
 のノ鐘カネはハ花ハナうウ敷シりリけケるルげゲにニ惜シめメ
 ぞゾもモなナどド夢ユメのノ妻メとト言イれレぬヌらラんンぞゾのノ
 外ソト曉アケのノ妹イモ脊セとト惜シむムきキぬヌきキぬヌのノ

恨ウラミとトそソもモるル行ユク方カタもモ枕マクラのノ鐘カネやヤ迦ヤ音ネくク
 らラんン又マタ侍サマシつツ宵ヨはハ更マシけケけケくク鐘カネのノ聲ネ
 聞キけケばバあアらラぬヌあアのノ鳥トリのノ物モノかカつツとト詠エイ
 せセしシもモ恋コイ路ジのノ伎キのノ音ネ信シのノ聲ネとト
 聞キくクもモのノせセとト又マタのノ老オシいイらラくクのノ寢ネ覚サ
 程チヨウ経キヨウるル古コとト今イマ思オモひヒ寢ネのノ夢ユメだダみミ
 もモ涙ナミ心ココロのノ淋シしシさサよヨのノ鐘カネのノつツくク

三平年

十

づくとし思を盡す曉をいつの時よ
 かくらべま 月落ち鳥啼いて
 霜天は満ちて冷く江村の漁火
 も仄かよ半夜の鐘の響音は客の
 船みや通みらん蓬窓雨滴りて
 別れし夕路の楫花がき寝ぞ寝
 るこの海は波風もおかして秋の

夜をがら月澄む三井寺の鐘
 ぞさやけき ぬかやすべき事の
 行事にて候ぞ くれある物狂の
 國里を回つて給はる人 くれか
 思もよらぬ事と候つるものかお
 さりあがら易き向の事事なて
 集らせうぶふてさかよられある

狂女にこそこの國里のつづくの者あり
 あるぞう ^{シテ} くれの駿河の國清見か
 子 ^{子カレ上カケテ} 開の者ふて命 ^{拍子合ハス} 行あう遠らんが開
 の者 ^{シテ} かし ^{シテ} いが ^{シテ} あら不思議や今 ^{カレシ}
 の物作せられつる ^{シツカリ} くら ^{シツカリ} く 神カ子
 の千端 ^{セン} 殿 ^{ミン} こそ ^{シツ} あれ ^{シツ} あら ^{シツ} 珍ら ^{シツ} く ^{シツ} や ^{シツ} ば
^{ワヤカケテ} 暫く ^{ワヤカケテ} くれ ^{ワヤカケテ} なる ^{ワヤカケテ} 狂女 ^{ワヤカケテ} の ^{ワヤカケテ} 塵 ^{ワヤカケテ} 忽 ^{ワヤカケテ} なる ^{ワヤカケテ} 事

事を ^{シツ} すす ^{シツ} も ^{シツ} の ^{シツ} かな ^{シツ} され ^{シツ} ば ^{シツ} こそ ^{シツ} 物 ^{シツ} 狂 ^{シツ} みて ^{シツ} ぬ
^{シツ} あ ^{シツ} う ^{シツ} くれ ^{シツ} の ^{シツ} 物 ^{シツ} は ^{シツ} 狂 ^{シツ} を ^{シツ} ぬ ^{シツ} も ^{シツ} の ^{シツ} を ^{シツ} 物 ^{シツ} お
 狂 ^{シツ} も ^{シツ} 故 ^{シツ} 逢 ^{シツ} ぬ ^{シツ} 時 ^{シツ} の ^{シツ} 行 ^{シツ} くに ^{シツ} 狂 ^{シツ} び
 ぬ ^{シツ} べき ^{シツ} くれ ^{シツ} の ^{シツ} 狂 ^{シツ} び ^{シツ} 神 ^{シツ} カ ^{シツ} 子 ^{シツ} あり ^{シツ} ぬ
^{ワヤカケテ} 申 ^{ワヤカケテ} され ^{ワヤカケテ} ば ^{ワヤカケテ} こそ ^{ワヤカケテ} 神 ^{ワヤカケテ} カ ^{ワヤカケテ} 子 ^{ワヤカケテ} と ^{ワヤカケテ} 申 ^{ワヤカケテ} す ^{ワヤカケテ} か ^{ワヤカケテ} 條 ^{ワヤカケテ} あり
 事 ^{ワヤカケテ} 申 ^{ワヤカケテ} され ^{ワヤカケテ} し ^{ワヤカケテ} 作 ^{ワヤカケテ} る ^{ワヤカケテ} 事 ^{ワヤカケテ} あり ^{ワヤカケテ} ぬ ^{ワヤカケテ} の ^{ワヤカケテ} 事 ^{ワヤカケテ} あり ^{ワヤカケテ} ぬ
^子 あ ^子 ら ^子 悲 ^子 しく ^子 や ^子 かの ^子 又 ^子 御 ^子 打 ^子 ち ^子 ら ^子 ぬ ^子 び ^子 ぬ

拜 悟道断がや色よせて給ひて。

この上はまのまぐに御名告りゆへ
今^{子中}行をか色むべきわれは駿河の
國^信清^光えんが^開の者ありし^中人^高高^人
の手よ渡り今この寺よありお
から母上われと事な給ひてかやう
は狂ひ出でみみし^中草^中草^中もわれは

知らぬなり^{シテ中}またわらははも物よ
狂^狂ことあの見^見別れ^別故^故あれは
適^適逢^逢ひ^ひみる^{みる}嬉^嬉まのま。増^増て母
よと^ト名^名告^告ら^ら事^事。我^我か^か子^子の^の面^面が^がせ^せあ
れど^ト子^子故^故よ^よ味^味了^了親^親の^の方^方に^に恥^恥も^も人^人目^目
も思^思われ^れず^ず。あ^あら^ら痛^痛々の^の御^御事^事や
餘^餘可^可目^目も^も時^時よ^よよ^よる^る物^物と^と逢^逢み^みと

悦びおめべー シテ上 嬉 シテ上 あからも
 喜める。 地上 安んず 地上 つかのり
 て餘れる後かな 地上 げに逢ひ物ま
 親と子の縁が重きせぬ契とて 地
シテ用 目こそ多のまは今宵も 地 此の
 三井寺より由り来て シテ 親子に逢ひ
 行故 地 での鐘の聲立て物狂の

ありぞとて シテ お咎めあり シテ 故あれ
甲 常の契よ 乙 かの鐘と厭ひよ
 親子のための契よ シテ 鐘故よ逢ふ
 良あり嬉 シテ 鐘の聲かな シテ かく
 て伴ひたち シテ 歸り シテ かくて伴ひたち
 歸り シテ 親子の契 シテ 重き シテ せぬも シテ 富貴
 の家となり シテ けり シテ げ シテ 有 シテ 鐘ま

孝^ノ行^ノの威^ト徳^トぞめてた^カり^ケる
威^ト徳^トぞめてた^カり^ケる

天鼓 概説 内三卷ノ五

昔唐土後漢の世に王伯王母といへる夫婦ありけり。一夜天より鼓降り
王母の胎内に宿ると見て一人の子を産みければ、其名を天鼓と名づ
けしに、其後天より鼓降りけるにぞ天鼓之を秘藏しけり。帝此由
を聞き、其鼓を召しに、天鼓深く惜みて山中に隠れしは、帝之を
探し出し、天鼓を呂水に沈め、鼓を内裏に收めけり。然るに此鼓打て
ども更に鳴る事無し。乃ち王伯を召して打たせけるに不思議にも音
を發しければ、帝あはれと思召し、呂水のほそりに臨幸あり、天鼓
の跡を篤く弔ひけるに、天鼓の靈現れて舞樂を奏し、悦びて歸りけり。

此曲前ハ調子抑ヘニ開カニ謡ヒ後ハサラリト朗カニ謡フヲ宜シトス
 小書 弄鼓ノ樂

役	附	装束	末	附
ワキ	勅使	着附厚板 側次 大口 紋附腰帶 扇		
前シテ	老翁五伯	面阿古父尉(又ハ小半尉) 射屐 着附小格子 茶水衣 殺子腰帶 襟淺黄 扇		
後シテ	天鼓	面慈童(又ハ童子) 黒頭 黒鉢巻 着附厚板唐織 法被 半切 紋附腰帶 襟白 唐團扇		
目番	四	曲柄	七	季
級	三	管吉順	土唐	所

天鼓

ワキ勅使 開カニ

これハ唐土後漢の帝ヲ侍人ある片
 下なり。さてもこの國の傍王
 伯王母とて夫婦の者あり。彼の
 者一人の子を持つ。その名を天鼓
 と名づく。かれを天鼓と名付くる
 事ハ。かれが母受中ハ天より一つの

天鼓
鼓降りくんだり。胎内は密とて
出生志たる子あればとて。その名
を天鼓と名づく。その後天より
真の鼓降りくんだり。おてはその
聲妙にして。聞く人感と催せり。
この由帝聞る。鼓と内裏
よるされ。天鼓深く惜み。鼓と

抱き山中は隠れぬ。おれどもいつく
か玉地あらねば。宵人を以て捜し出
だ。天鼓と。呂水の江は沈め。鼓
を内裏よるされ。内裏殿雲龍閣
に据え置かれて。ゆよその及坂の鼓
を打たせらるれども。更し鳴る事
あ。いかさまの鼓と。歎き。ゆらぬ

と思ふ。さうする。向。彼の者の父王伯
をさして打たせよとの宣言は任

せ。ら。今。王伯が私室へと急ぎの

シテ老翁上抄用カ沈シテ
一声
ヨク
拍子合

露の世よ。あ。後考の。の。いつまで

か。又。この。秋。よ。踊。る。ら。ん。傳へ。聞。く

孔子の鯉魚よ。あ。れ。て。思。の。火。と。胸

よ。焚。ま。い。白。居。易。の。子。と。先。だ。て。て。極

よ。踊。る。薬。と。恨。む。と。れ。皆。仁。義。禮。智

信の祖所。文道の大祖たり。我等

が。歎。く。の。咎。あ。ら。う。と。思。ひ。思。ひ。よ

堪へ。か。ぬ。る。涙。い。と。あ。ま。い。孩。か。あ

下系
用カシタレヌ様
拍子合

思。つ。と。ら。み。心。の。あ。ら。ん。夢。も

あ。ら。び。現。も。あ。ま。い。夢。の。中。で。悲

ま。あ。ま。い。夢。の。中。で。悲。し。き。よ

さくらばさびあでとシテ思シひヒ寝ニのウ思シひ
 せとシテ思シひヒ寝ニのウ園ニのウ現ニまサ生サれキま
 てテ忘ワれルんト思シひヒこソ忘ワれぬより
 思シあレだカ行キ故ノうキのウ命ノ命ノ
 のウみコそ恨なレ命ノのウみコそ恨なレ
早いコこのウ屋ノ内ニ王ノ伯ガあルか
シテ誰カて渡りゆう誰れハ帝ヨり

のウ宣旨あテあルぞシテ宣旨とハあラ
 思シひヒよラびヤ行キ事ヲてシ屋ノ内ニぞ
 さテも天敷ガ教内裏ニまサらレて
 及ハいろいろ打タたセらレれども更に
 傷ヲ事ヲあラいかさマ主ノあと款
 きの終らぬと思シひヒ同ノ王ノ伯ノ
 とあつてはレまの宣旨あテあル

ぐ。きりて。参内。はり。佐へ。信長シテ強ハの
 承り。の。さ。り。あ。ら。ら。勅命キヨウ。また。は。鳴ら
 ぬ。鼓。の。考人ラウジン。が。ま。り。て。打ち。た。れ。ど
 と。て。行ナニ。は。聲。の。出。づ。べ。き。ぞ。い。や
 り。や。され。も。心。得。たり。勅命。と。背。ま
 一。考。の。父。あ。れ。ハ。重。ね。て。失。を。れ。ん
 だ。め。き。て。ぐ。あ。る。らん。よ。し。し。を。れ

心。ド。あ。り。我。が。子。の。た。め。は。失。は。れ。ん
 は。ろ。れ。て。そ。考。の。望。あ。れ。あ。ら。致。く
 ま。ど。や。損。て。ま。り。ゆ。べ。い。ら。わ。い。わ
 さ。や。う。の。宣。旨。あ。ら。び。だ。た。た。鼓。を
 打。た。せ。ん。ま。の。具。の。た。め。は。か。り。の
 勅。院。あ。り。あ。ら。ら。参。り。給。ふ。べ。い
 だ。ら。ひ。罪。よ。は。洗。む。こ。も。た。と。ひ。罪

シテ上ニテ

拍子合

天鼓

一の沈むとも。又は罪も沈まらん
ガトサト 一の沈むとも。又は罪も沈まらん
 とも。あきらみ我子の形見は帝
チガシ 一の沈むとも。又は罪も沈まらん
 を拝みまらせん。帝を拝みまら
ワヤ 一の沈むとも。又は罪も沈まらん
 せん。急ぐ宮程あく内裏まである
シテ 一の沈むとも。又は罪も沈まらん
 ぞ。此方へ来りて。勅渡す程よ。
中 一の沈むとも。又は罪も沈まらん
 是迄の事ありて。いづれも。若人が事
ト 一の沈むとも。又は罪も沈まらん
 を。免あるべし。す所ハ理

あれども。まづ鼓を仕りて。鳴らざる
シテ あれども。まづ鼓を仕りて。鳴らざる
 かな。事急りて。仕りて。い
シテ かな。事急りて。仕りて。い
 辞も。叶みま。勅は。應じて。打
ツ 辞も。叶みま。勅は。應じて。打
 つ鼓の聲も。出でば。うれし。そは。
ツ つ鼓の聲も。出でば。うれし。そは。
 神か子の形見。と。月ツキの。よ。は。輝く
ツキ 神か子の形見。と。月ツキの。よ。は。輝く
 玉殿。は。始めて。臨む。考の。才の。
ツキ 玉殿。は。始めて。臨む。考の。才の。
 生きてある。才は。久方の。生きてある。
ツキ 生きてある。才は。久方の。生きてある。

地次才上
 拍子三合

渡り山と翻えては岸よりまき
シテ上ウツリ
 親子ハ三界の首枷と圓けハ滅
マ
 老い心家の海の雨の神志ほれ
チ
 増るま身と恨みてもそのか
チ
 のあまき世は沈む罪科はた命あ
甲
 や明暮の時の鼓の魂も思をれぬ
下
 月こそ恨あね
下
 鼓の時も移る
下

あり涙を止めて老人よ急いで
甲
 鼓打つ一げはげおそれの
甲
 糸や勅命の老の時もうつるなり
甲
 急いで鼓打たうよ打つや打たす
甲
 や老波の立ち寄る影も夕月の
甲
 雲龍岡の光さす玉の階
甲
 玉の床よ孝の歩も足弱く薄氷
甲

を踏む如くしてシテ心もあやまらぬこの
鼓ノ打てばハきやその聲の心耳
を沈マまへシ聲出でテげにも親子
の證ノの聲ノ君もモ氣ヲ思フるヲして
龍顔ノは清ク淨クをシ浮ル吟ミぞハ有キ鞋キ
早ク又ハ老人ノ只シテ今ハ鼓ノ音ノ出テたル
事ノ減ル氣ヲ思フるヲ向テ老人ノ

よハ較ノの寶ヲと下ニさシなりシ又天
鼓ノ節ヲとシ管ヲ絃ヲ揉ミて御用ひハあ
るベまシこの勅ヲ復スなりシ心ヲ安クなシ
まづまづ老人ハ私ヲもハ歸リのル人ニ
あら省カむヤばハ老人ハ私ヲも
歸リのル人ニ史ノ語ノ間
早ク又ハ老人ハ私ヲもハ歸リのル人ニ
からとシ沈マめル品ノ水ノ境ヲ亦ハ幸キ

天鼓

ハ

上待
待合

あつて。同く。天の鼓を据ゑ。
糸竹呂律の聲をよ。糸竹呂律
の聲をよ。法事をあつて。亡き跡
を御弔ひ。有難き頃。は初秋の
を。あれば。はや。三休の夏。たけ。風
聲の秋の空。夕月の色も照り
そひて。水溜々として。波怒々たり

後シテ夫敷重上
一声
拍子三合ハズ

あら者。程の御弔や。あ。勅とお言ま
し。夫。罰。あつて。呂。水。は。沈。み。し。あ
あれ。べ。ほ。ほ。の。世。ま。で。も。苦。み。の。海。は
沈。み。浪。は。打。た。れ。て。呵。責。の。責。も
際。あ。かり。し。思。ひ。さ。る。外。の。御。弔。は
浮。ひ。出。で。た。る。呂。水。の。上。曇。ら。ぬ。時
代。の。有。難。さ。よ。お。思。ひ。や。あ。は。や

天鼓

更けるるぐる氷の面は化へたる人
の見えたるはめかなる者ぞ名を
名告れ シテ内ウケテ 天鼓が亡きあるが
御吊の有難さをこれまで現れし
りたり 早カルサアリ さそへは天鼓が七霊ある
かや 内 知らばかふる音楽の舞も
天鼓が手向の鼓打ちてその聲

出づならんげにも天鼓の證ある
べ スラ やりや鼓と伝れ シテ内朝カニ 嗟やそ
の勅院ごとくゆふ月か 輝 やく玉座の
あたり 早カルサアリ 玉の笛の音聲伝えて
月宮の音もかくやと 早カルサアリ かり天人
も影向 シテ朝カニ 天降り 早カルサアリ
ます氣色 早カルサアリ 打つあり

○切蓮華子

シテ内朝カニ

シテ朝カニ

早カルサアリ

早カルサアリ

天アマのノ鼓ツヅミ 上ウヘのノ月ツキ 仲ナカのノ聲コエ 大オホキク 打ち鳴すその聲のコエ 打ち
 鳴すその聲のコエ 呂水ロスイのノ波ナミのノ溜タマリ々々
 打ウつツありアリ打ウつツありアリ江エのノ聲コエのノよりヨリ
トくク急イサ行ユクのノ手テ向ムカひヒ舞マユ楽ラクのノ有アル難ナシやヤ
シテ中ナカ明アカカニ 面オモ白シロやヤ時トキもモげゲるル面オモ白シロやヤ時トキもモげゲるル
○独トコ今イマ 拍ヒタのノ中ナカ 秋アキ風カゼ樂ラクあアれレやヤ松マツのノ聲コエ柳ヤナギのノ拂ハラフ
光つツてテ月ツキもモ涼スズシくク星ホシもモ相アイ逢ワイみミ空ソラ

あアれレやヤ鳥トリ鵲セウのノ橋ハシのノもモとトよヨ紅ベニ埃ホコ
 をヲ敷シきキ二ニ星ホシのノかカたタのノ前マエにニ風カゼ冷ヒヤシ
 かカもモあアもモ更マシてテ夜ヨ半ナあアもモはハやヤ
 あアりリぬヌ人ヒト向ムカひヒのノ水ミヅのノ南ミナミ星ホシはハ北キタよヨ
 たタんンだダくクのノ天アマのノ海ウミ面オモろロのノ浪なみ
中ナカのノ元ゲン 立ちタチ添ソみミやヤ呂水ロスイのノ埴ハのノ月ツキよヨ嘯セウ
 きキ水ミヅよヨ戯オモシれレ波ナミをヲ穿スちチ袖スズメをヲをヲすス

天鼓
 夜遊の舞樂も時去りて五更
 の一鐘も鳴り鶏はハ聲のほの
 ぼのとあも明け白む時の鼓數
 かのつゝの巷の聲よ又打ち寄り
 て現か夢らまた打ち寄りて
 現か夢らとこそありにけれ

大正九年三月貳拾日印刷
 同 年三月廿五日發行

著作権
 許不認

444

訂正著作者 廿四世 觀世元滋

發行所 檜 常之助

發行所 檜 大瓜

印刷所 江川堂

東京市四谷區傳馬町貳丁目



終

